風薫る

人間の五感、つまり視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚は健全な人なら均等に持っているが、知覚された結果は十人十色である。そこには成長過程における家族や土地柄から得た教育・幼児体験などによって異なる反応が違う。例えば黄色い自動車を見て「きちがい色として嫌悪」あるいは「斬新で好感」などいうように正反対の反応が出てくる。

日本人にとって柑橘系の香料はおおかたが「よい」と思われているが、「鹿のフグリ」や「鼠の性腺」のにおいは強すぎて嫌がる御仁もいるだろう。電車で外国人と並んだ時にその香料のきつさに頭は痛くなるし、目は眩むという経験をした人は私ばかりではないだろう。

唐の玄宗の奥さんである楊貴妃は性腺の分泌が活発だったという。彼女が風呂に入った後、周囲の女性たちはその残り湯を争って汲み、自らの部屋に撒いたという。日本人は絶対できないまねである。中国人も日本人と同じく腋の臭いを嫌うという。腋臭は「胡臭（外国人のくさみ)」と書く。だから楊貴妃の匂いはどういう匂いだったのだろうか。

クサヤのにおいは私にとっては脳天をくすぐるくらい良い匂いなのであるが、昔飲み屋で注文したら横に座っていた人に臭いと怒られた。かといって私はオイルサーディンはお断り。

マツタケは日本で供給が間に合わなくなったとき最初韓国から輸入した。当初はこんな臭いものを日本人はよく食うものだ、としていた韓国人もさほど長い期間をかけず慣れ親しんでしまった。だからマツタケは韓国でも高騰し今は北朝鮮・中国・カナダあたりが供給地だ。

においの価値は民族や個人にとって差異のあるものだから、一概に価値を決めつけられるものではない。

嗅覚に関する言葉として、日本語では「くさい」「かおる」「におう」などがある。

広辞苑では次のように意味付けられている。

「くさい」→いやなにおい。

「かおる」→よいにおい。

「におう」→赤などの鮮やかな色が美しく映える。香り・臭気。ほんのり・ぼんやり。

広辞苑の解説をさらに解説するという愚行をお許しいただいて、

「くさい」は「腐る」と同源の言葉であろう。

「かおる＝かをる」は「香居る」ではないだろうか。

「におう」の「に」は「丹」、つまり「辰砂（＝赤色)」である。「赤が鮮やかに映える」の意味である。「におう」の元の意味がこれである。赤い実体から反射した赤い色が周囲に

鮮明にうつりこむという概念だろうか。

副次的意味として「臭覚」に関する意味を持たされた。日本刀の刃文の作り方で「においでき」というのがある。或いは「ほんのり」「ぼんやり」というのがある。

どうやら「におう」とは「明瞭な実体がみえないが実体の存在を確実に予測させるもの」が「におい」なのではあるまいか。

「におい」自体に好悪の概念を含まないと思われる。だから「においがする」という表現では、それが危険を察知したのか、安寧な気分でいるのかを判断できない。「におい」の意味の中に「良い香り」と「悪臭」の二つがあるが、このあたりを言っているのかもしれない。

冒頭申し上げたように嗅覚の価値判断は個人的価値観がきいてくる。

この点漢字は明快である。「善し悪し」「快・不快」など明確に分けている。嗅覚で感じた結果を表示する漢字には次のようなものがある。

まずは良い意味でのにおい、つまり香り。

芬＝草が生えて香る。熟語例「芬芬」「芬香」。

芳＝香草。熟語例「芳香」「芳醇」。

香＝「黍＋甘」で「甘く熟した黍稷の香ばしい匂い」。熟語例「香料」「香華」。

穀物の匂いは単に匂いだけなら嫌がる人もいる。おそらくそれを食することによって生命活動が継続できるという期待から心理的に感ずる香りなんだろう。

薫＝香草。「草＋けぶる」。熟語例「薫陶」。

馥＝香気。熟語例「馥郁」。

馨＝香りが遠くに聞こえる。熟語例「馨香」。

次は悪い意味でのにおい、つまり臭み。

臭＝略字は「自(鼻)＋大」だが、元の文字は「自(鼻)＋犬」である。犬の鼻でにおいを表す。熟語例「臭気」「臭聞」。

葷＝辛い菜、薑の類、葱韮（たまねぎ、など）。お寺の山門前に掲げてある「葷酒山門に入るを禁ず」の「葷」である。

？＝臭い。腐敗のにおい。「歹(頭蓋骨)」があるので死臭ではなかろうか。

蕕＝水辺の臭い草。「蕕薫」と書いて「悪しき香りとよき香り」とし「善悪」を意味する。

葱類のにおいは個人差で大きく評価が変わるが、葱類は個人的には好きなので「葷」を悪い意味には使いたくないが、ともかく漢字では香りと悪臭をはっきり分けている。

さて、これらの例の中に「匂」が出てこないのはなぜか。意識的にそうしたのだが、「匂」は

漢字でなくて国字である。日本人は「におう」という抽象的な意義をもつ漢字を見つけられなかった。上に述べたように漢語では香りと臭みを分けている。そこで漢字の日本語彙への借用をした。

日本人はまず漢字「匂」を「におう」とした。「匂」は漢字では「ひとしい・ととのう」の意味だが、国訓（日本語的使用）で「におう」として使用していた。そのうち中の「 」を「ニオヒ」の「ヒ」に変えて国字「匂」を造ったのである。

「におう」は嗅覚に感じた何かであり、具体的に「どういう」というものではない。だから私たちは「何かにおうね」「へんなにおいだ」「気持ち悪いにおいだ」「いいにおいがする」「何とも言えないにおいだ」などというのである。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000